

ロミオはジュリエット

—楊振声「彼女はなぜ突然気が触れたか」と
凌叔華「こんなこともある」—

杉 村 安幾子

1. 序—女学校の誕生と女学校小説

中国の長い歴史は男性が造り上げたものであり、女性はずっと周縁的な存在であると見なされてきた。隋の時代に始まった科挙が、高級官僚登用試験として1300余年もの歴史を擁し、男子には中央に出て能力を発揮する機会が与えられていたのに対し、女子には家庭における娘・嫁・妻・母としての役割をどのように果たすかを教諭した女訓書が与えられるのみで、女子は所謂学校教育を受けることはおろか、外に出る自由もままならなかった。一部の特殊な女性を除き、女性が歴史の前面に出て来ることはなく、その意味から言えば女性には名前も語るべき言葉も与えられてこなかったと言えるだろう。国家の発展のためには女子にも教育が必要だという主張が起こり、女子教育の扉が開かれたのは、清末になってからのことである。

1844年、イギリスのキリスト教団体の支援の下、寧波に寧波女塾が開学する。これを皮切りに香港に英華女学（1846）が、上海に裨文女塾（1850）が、北京に貝満女塾（1864）が創立するなど、各地に女学校が次々と開学。これらの女学校は基本的に全てキリスト教会が運営し、教会の仕事に携わる女性や優秀な家庭の主婦の育成に教育の主眼が置かれた。

女子教育の始動が外国人の手によったことは、中国の衰退を憂い、国家の振興・発展のために運動をしていた当時の中国知識人達を刺激し、1898年5

月、梁啓超 (Liang Qichao、1873-1929) らによって上海で中国女学堂 (開設当初の名は経正女学) が創設された。この中国女学堂は変法運動の失敗によって 1900 年には閉鎖を余儀なくされるが、中国において中国人自身の手によって創設された初の女学校であった。その後、1902 年には上海に愛国女学と務本女学、1903 年には江蘇省同里に明華女学、広東に育賢女学など、続々と中国人による女学校が開設されていき、1907 年時点では女学校は 428 校、女子学生は 15,496 人にまで増加する (共学校に通う女子学生も含む)¹。こうした潮流を受け、清朝政府の学部 (教育を統括する部署) は 1907 年 3 月、「女子小学堂規則」と「女子師範学堂規則」を制定・発布。女子教育は正規の教育システムの中に組み込まれ、女子教育の推進・拡充に弾みをつけることとなった。尤もこの二種の「規則」には、「中国の女徳は歴代尊重されてきた」ゆえに、今日もそれを重視すべきだとし、「家計を助け、家庭教育に有益なることを期す」などの文言も見られ、古い教育システムが色濃く残存していたが、長らく教育を受ける権利を奪われていた女子に学校という場が与えられた意義は大きい。

こうして各地に創立した女学校は、後に文壇や各学界で活躍することになる女性知識人を多く輩出した。例を挙げれば、魯迅 (Lu Xun、1881-1936) の『狂人日記』(1918) より一年早く『一日』(1917) を発表したことで、中国現代文学史上初の白話による創作実践者となった陳衡哲 (Chen Hengzhe、1890-1976) 及び抗日戦争初期の延安の様子を『陝北訪問記』(1939) にまとめた陳学昭 (Chen Xuezhao、1906-1991) は、上海愛国女校で勉強している。東京大学の初の女性外国人講師となった謝冰心 (Xie Bingxin、1900-1999) は、福州の女子師範学校予科を経て、北京の貝満女中 (前身は上述の貝満女塾) を卒業。蘇雪林 (Su Xuelin、1897-1999)・廬隱 (Lu Yin、1899-1934)・馮沅君 (Feng Yuanjun、1900-1974)・石評梅 (Shi Pingmei、1902-1928) は北京国立女子高等師範学校を卒業している²。尤も、彼女達は当時の中国においては、ごく少数の恵まれた存在であったことは言うておかねばなるまい³。

教育を受けるようになった少女達は、学校において所謂学課だけでなく「書く」ことを身に付けていった。それまで「書く」ことは「経国の大業にして、

不朽の盛事なり（文学は国を治めることに匹敵するほどの大事業であり、永久に滅びることのない立派な仕事である）」⁴であり、言わば男性のみに許された特権であったのだが、学校教育によって少女達もエクリチュールを手にしたのである。語るべき言葉を得、「書き」始めた彼女達は、小説・散文・詩など形式は様々であったが、その中で自らの人生・思考・感情を表現していく。上記の女性作家・文人達はその手にしたエクリチュールで自らの言葉を語り、結果として中国現代文学史にその名を留めたのであった。

民国期中国の小説には、女学校を舞台にした作品を多く見出すことができる。女学校を舞台にし、女学生や女性教師を主要登場人物とした小説を、今仮に「女学校小説」と呼ぶことにするが、この女学校小説として代表的な作品には、廬隱の『海濱故人』（1923）、蕭紅（Xiao Hong、1911-1942）の『手』（1936）などが挙げられる。

無論、中学・高校などの中等教育を舞台にした芸術作品は、小説に限らず現在でも数多く生まれており、また今後も生まれていくであろう。そうした作品が多く生まれる理由としては、第一に、人格を形成し、自我の確立に悩み、友情を育み、将来への道を模索するという、人の一生の中で特別な一時期とも言うべき青春期の少年少女を主要登場人物とすることで、詳しい説明を要せずして作品鑑賞者の共感を得やすいことが考えられる。第二に、彼ら少年少女を世間から一種隔離された学校という空間に配置することで、家庭の事情や同性異性との感情の繾綣、将来への不安などの理由から様々な事件が起こり、作品としての膨らみや奥行を出しやすいからではないだろうか。しかしながら、この二点はあくまで現在の見地からの考えに過ぎない。民国期中国に限定して言えば、女学校を舞台にした小説は、多感な青春期の少女が主要登場人物であることで読者から一定程度の共感は得られるかもしれないが、女学校という場の制約は、当時の女子の就学率に鑑みれば誰からも共感を得られるとは到底言えない。寧ろ、女学校が基本的には男性を排除した世界であることに基づけば、世の読者の大半を占めていたと考えられる男性読者の眼には、物珍しさや好奇心の対象として映じていた可能性もある。

五四作家の一人である楊振声（Yang Zhensheng、1890-1956）⁵に「彼女はな

ぜ突然気が触れたか（原題：她為甚麼忽然發瘋了）」（1926）という女学校小説がある。同類の小説の中では比較的早い時期に執筆された。注目すべきは楊振声が男性作家であり、女学校生活を経っていないにも関わらず、女学校小説を書いたことである。そして、凌叔華（Ling Shuhua、1900-1990）⁶は、この楊振声の「彼女はなぜ突然気が触れたか」を受け、登場人物の名前や舞台及び基本的な設定を同じくして女学校小説「こんなこともある（原題：說有這麼一回事）」（1926）を発表した。「こんなこともある」は女性同性愛小説としてとらえられ、フェミニズムやジェンダーの視点からも分析や解釈が試みられている⁷。それらの先行研究では楊振声の「彼女はなぜ突然気が触れたか」との関わりについて言及したものもあるが、あくまで先行作品としてとらえており、「こんなこともある」を中心主題としている。

本稿では楊振声の「彼女はなぜ突然気が触れたか」と凌叔華の「こんなこともある」の二作の分析・検討を通して、楊振声の女学校小説執筆の意図を探り、凌叔華が何故楊振声作品の大枠を踏襲した上で別の作品を執筆したかの考察にもつなげてみたい。その中で、民国期中国における女学校小説のテーマの変遷についても言及することになるだろう。

2. 楊振声「彼女はなぜ突然気が触れたか」と凌叔華「こんなこともある」

本章では楊振声「彼女はなぜ突然気が触れたか」（以下、「彼女」と略記）と凌叔華「こんなこともある」（以下、「こんなこと」と略記）について、作品の梗概及び掲載誌、作品を取り巻く状況について概観しておく。

2. 1. 作品梗概

楊振声「彼女」は民国 16（1926）年 1 月 11 日、『晨報』副刊第 52 期第 1423 号に掲載された。『晨報』については後述するが、副刊とは新聞の文芸・学術欄を謂う。この時楊振声は 36 歳、前年 2 月に武昌大学教授兼予科主任に就任していたが、12 月には母校北京大学中文系の教授となっている。北京大学には当時、胡適（Hu Shi、1891-1962）・陳源（Chen Yuan、1896-1970）等、楊振

声と同様の欧米留学組が揃っていた⁸。

「彼女」は次のような物語である。ある女学校の創立十周年記念のイベントで、学生達によって『ロミオとジュリエット』が上演されていた。ロミオを演じているのは、気性のさっぱりした少年風の顧影曼、ジュリエットを演じているのはグラマラスな鄧雲羅。彼女達は我を忘れるほど演技に入り込んでいた。二人は平素から親しかったが、芝居の上演以後はより一層親密になり、その度合いは日を追うごとに増していき、片時も離れないほどであった。夏季休暇に入り、鄧雲羅は帰郷し、顧影曼は学校に残ることになる。鄧雲羅は帰郷の前日、親に結婚させられそうになっていることを顧影曼に告げる。秋、新学期が始まったが、鄧雲羅は学校に戻って来ない。ある日の晩、顧影曼は偶々同級生達の話を目にした。鄧雲羅が婚約したこと、そしてそれを顧影曼に告げてはならないこと。顧影曼はそれを聞くと突然大笑いを始め、一人で踊りながら芝居でのロミオの歌を歌い、ぼったりと倒れる。同級生達は慌てて彼女を助け起こすが、「顧影曼はなぜ突然気が触れたのだろうか？」と訝しく思うのだった。

楊の「彼女」に関する研究論文はなく、楊の作品全体に関する論文においても「彼女」への言及はない。

一方、凌叔華の「こんなこと」は「彼女」と同年の5月3日、「素心」というペンネームで『晨报』副刊に掲載された。凌叔華は二年前に燕京大学外文系を卒業したばかりの26歳。学生時代に開始した小説創作を続けており、『酒後』(1925)が評判になっていた。「こんなこと」掲載の二か月後、楊振声の同僚である陳源と結婚する⁹。

「こんなこと」は北京の女学校C校で、やはり創立十周年記念祭で『ロミオとジュリエット』が上演されることになるところから物語は始まる。ロミオ役は話好きで活発な北方出身の影曼。ジュリエット役は雲羅、影曼よりも一級下である。二人は学生達から「ロミオ」「ジュリエット」と呼ばれている。最後のリハーサルが終わった日の晩、影曼は雲羅を学生寮の部屋まで送って行く。二人は疲れて雲羅のベッドに倒れ込み、はしゃいで過ごす。影曼は舎監の見回りを恐れて自分の部屋へ帰って行く。翌日、芝居の上演終了後、

影曼はやはり雲羅の部屋へ。舎監の見回りが無いらしいと知り、影曼は雲羅の部屋に泊まることにする。二人は寄り添い合って、一つの布団に寝た。それ以降、影曼と雲羅はほぼ毎晩一緒に散歩をし、語り合う仲になる。しかし、半月ほど過ぎた頃、雲羅は月を見ながら涙を流し、兄から上司の後妻になるようにせつつかれて困っている旨を影曼に告げる。影曼はそんな人と結婚するな、私達はずっと一緒にいようと言う。夏季休暇、雲羅は故郷南京へ帰省する。影曼は雲羅へ二通手紙を送り、一週間あまりして雲羅から返信が届くが、それっきり雲羅の音沙汰はなくなる。新学期が始まり、影曼は何通も雲羅へ手紙を送るが、雲羅は戻って来ない。ある日、影曼は同級生達が雲羅の結婚について話題にしているのを耳にし、気を失いばったりと倒れる。驚いた同級生達は、影曼を部屋に担ぎ込んでベッドに寝かせた。

細かい設定に相違はあるものの、「彼女」と「こんなこと」の物語の大枠は完全に同じであることがわかるだろう。これについては、楊振声が「こんなこと」の本文の前に「附字」として次のような文章を載せて説明している。全文を見てみよう。

私は1月11日の晨报副刊に「彼女はなぜ突然気が触れたか」という小説を発表したが、これは極めていい加減な出来である。これは全部、志摩が悪いのだ。

志摩は朝十時に私に手紙を寄越し、その日の午後五時までに原稿を出せと言うのだ。こんな非人情なことは、志摩しかできない。私の当初の計画としては、物語はずっと長いものになるはずで、元々一日では書き終えることができなかったところへ、折悪しく来客が二人もあったのだ。一人目の客が帰った後、私は作品の三分之一を削る決心をし、二人目の客が帰った後、卓上の時計を見たら、否応なしに更に三分の二を削らざるを得なくなり、結果としてこんな憐れな作品になってしまったという訳だ。掲載後、皆さんから〔影曼が：杉村注〕気が触れるのがあまりにも慌ただし過ぎると言われた。叔華もやはりそう思ったようだ。

私は叔華なら絶対に私よりうまく書けると思ったので、叔華に書き直してくれるよう頼んだ。果たして彼女の作品は心が籠って繊細で美しい。人は皆、「妻は人様のが良いが、文章は自分のが良い」と言う。上の句は間違っていてほしいのだが、生憎

正しく、下の句は正しくあってほしいのだが、生憎間違っているのだ。これ以上何をか言わんや。¹⁰

これに拠れば、楊の「彼女」執筆後、楊自身その出来栄えに不満でもあり、周囲の仲間達からの評価も芳しくなかったため、楊が凌に同じ題材で書いてほしいと頼んだということだろう。これに対し、凌も1926年5月5日『晨报』副刊に発表した『こんなこともある』に関する書信並びにちょっとしたこと』という文章において、「私は新暦の正月にこの小説を書き終え」と述べ、「振声の原著に基づいて描写した。」¹¹と明記している。これは凌が楊の「彼女」を1月11日の『晨报』副刊掲載以前に読んでおり、楊が述べているように同題材で書くように頼まれて執筆したことを意味している。同題・同テーマでの作詩は、漢代以来の楽府題にも見られるように、古代においては例を多く見出せるが、このように同様の題材で複数の作家が小説を発表するということは、中国現代文学史上珍しいことではないだろうか¹²。

凌は1919年、天津の第一女子師範学校に入学している。凌の「こんなこと」のC校のモデルは、凌自身の母校であるこの天津第一女子師範学校かもしれない。また、この1919年の5月4日からは、北京で五四運動が起こっており、楊振声は民族主義的愛国運動であった狭義の意味での「五四運動」を象徴する趙家楼焼打ち事件の実行者の一人であった。凌も天津で五四の学生運動に参加しており、広く学生による民族主義的愛国組織の中で、お互い面識がなかったにしても、同方向を向いての活動を展開していた。二人がいつどのように知り合いになったかを明らかにする資料はないが、二人が作品を掲載した『晨报』副刊は、二人を含む在北京文人グループによって支えられていたものである。

凌の「こんなこと」については、1. でも述べた通り、女性同性愛小説として研究論文がある。3. でより詳しく紹介したい。

2. 2. 『晨报』副刊及び楊・凌と徐志摩との関わり

『晨报』は、そもそもは1916年8月、梁啓超を中心とした進歩党によって

北京で創刊された機関紙『晨鐘報』を前身とする。創刊当時は李大釗（Li Dazhao、1889-1927）を総編集長としていたが、一か月余り後に李は解雇されている。北洋軍閥寄りであった『晨鐘報』は1918年9月、対立する段祺瑞による安福国会成立後、閉鎖の憂き目を見るが、12月には『晨报』と改称して続刊。1919年2月には第七面を副刊に改め、再び李大釗を編集に迎えている。1920年からは孫伏園（Sun Fuyuan、1894-1966）が副刊の主編を務め、1921年10月には正式名称を『晨报副鐫』として独立発行に切り替える。この副刊の歴史的貢献としては、新文化運動の鼓吹と宣伝が挙げられ、その流れを汲む小説・詩・戯曲が多く掲載された。その代表とすべきは魯迅「阿Q正伝」（1921）の連載であっただろう。また、ゴーリキー、チェーホフ、トルストイ、ツルゲーネフ、モーパッサン、イプセン、シェイクスピアといった外国作家の作品が翻訳掲載され、中国において誕生したばかりの口語に拠る新文学に多大な影響を与えた。マルクスの「労働と資本」やデューイの新実験主義が紹介されるなど、思想・学術面での寄与も相当であった。孫伏園は1924年10月、魯迅の「私の失恋」という作品の掲載をめぐる『晨报』の総編集長と対立、結果的に副刊編集を辞任している。

1925年10月から副刊編集となったのが、徐志摩（Xu Zhimo、1897-1931）である。米国クラーク大学、コロンビア大学、英国ロンドン大学、ケンブリッジ大学に留学経験のある徐志摩の周囲には、欧米留学経験者が集まっており、彼らの多くは陳源を代表格とする現代評論派であった。雑誌『現代評論』は1924年に創刊され、28年には終刊を迎えてしまうが、思想・文芸面では雑誌『新月』（1928-1933）へと直接つながっており、コロンビア大学とハーヴァード大学に留学経験のある楊振声と、陳源の妻となる凌叔華の二人もこの現代評論派・新月派の大きな輪の中にいたのである。楊の「附字」は、徐志摩が突然楊に寄稿するように要求したとわざと恨みがましく述べており、誌面においてこのように作品誕生の背景や内幕を明らかにしていることから、当時の『晨报』副刊の寄稿者及び主要読者の多くが徐志摩と楊振声の知人友人であったことがわかる。徐志摩・凌叔華をそれぞれ「志摩」「叔華」と親しげに呼ぶ楊の「附字」は、一種の内輪話として読者に受け入れられていたので

あろう。¹³

凌叔華は前述の『『こんなこともある』に関する書信並びにちょっとしたこと』という文章において、編集長であった徐志摩宛ての書信の形式を採った。「こんなこと」掲載の2日後のことである。凌は冒頭、次のように述べている。

志摩へ：5月2日の副刊を見て、あなたが見付け出した私の「こんなこともある」が、滅茶苦茶に掲載されてしまっているのに気付きました。こんなお手間を取らせてしまって、ご苦労様です！私は自分がこの28、9ページの原稿にページ番号を振らずに、ほとんど適当に丸めてしまったことを覚えています。以下の声明は、あなたの不注意への恨み言では決してなく、実際の所、説明なのです。そうしないと不安なものですから。これはまた、私の怠惰を表してもいますし、あなたが記者としての責務を果たさなかった訳ではないことの証明でもあります。¹⁴

この段に続いて、「7頁11行目から続く、影曼と雲羅が夜にキャンパスを散歩しながら親しげに語り合う三つの段落は、本当は6頁27行目の第二段落の前に入るべきです」、「6ページ27行目の前には、本当は雲羅と影曼が互いに惹かれ合い始める描写があったのです」といった言い訳とも弁明ともつかない解説が並ぶ。要は、原稿の掲載が、凌が想定していた完全な形ではなかったということであった。

主編徐志摩は凌のこの書信に対し、続けて「志摩附識」と題した一文を掲載した。徐は「私は確かに焦燥と怠惰の罪を犯した。ここに謝罪する」と素直に謝罪し、「私達は彼女〔凌叔華を指す：杉村注〕が早く修正すべき箇所を修正し、補うべき箇所を補い、私から見れば大変美しいこの一篇が罪なく破綻してしまうことなどないように願う」¹⁵と述べた。

しかしその後、完全作が後に発表されたということはなく、後年凌叔華の作品集が刊行された際には、明らかな原稿配置の錯誤が正され、文言の修正が施されただけであった。

3. 「彼女」から「こんなこと」へ

本節では、楊の「彼女」から凌の「こんなこと」への変奏とその意味を探っていく。

3. 1. 中国におけるシェイクスピア『ロミオとジュリエット』

さて、「彼女」と「こんなこと」双方において、女学校の創立十周年記念祭で上演される『ロミオとジュリエット』。今でこそ中国でもシェイクスピア作品の悲劇の一つとして有名であり、中国の民間説話『梁山伯と祝英台』や明代の小説『牡丹亭』が「中国版ロミオとジュリエット」などと紹介されるように、詳しい解説抜きに“star-crossed lovers”や「周囲に祝福されない恋人同士」の謂いとしても知られているが、「彼女」と「こんなこと」が発表された1926年時点では、どこまで名が知られていたのであろうか。

そもそも、シェイクスピア (W. Shakespeare, 1564-1616) が初めて中国に紹介されたのは1844年であるという。魏源『海国図志』にある「沙士比阿」がシェイクスピアを指すが、その時点ではあくまで名前の紹介にとどまっている。1903年にラム『シェイクスピア物語』(Lamb, *The Tales of Shakespeare*) が『滌外奇譚』として翻訳され、シェイクスピア作品も紹介されたが、無署名のため訳者不詳であり、更にこの中には『ロミオとジュリエット』は含まれていなかった。1904年に『シェイクスピア物語』の全訳が林紘 (Lin Shu, 1852-1924)・魏易によって『吟辺燕語』として商務印書館から刊行され、『ロミオとジュリエット』は「鑄情」として収録されている。しかし周知の通り、林紘自身は外国語が出来ず、所謂「林訳小説」とは外国語の出来る者の口頭訳を、林紘が巧みな古文で書いたものであった。

シェイクスピアの戯曲作品が完全な形で翻訳されたのは1921年、劇作家の田漢 (Tian Han, 1898-1968) が訳した『ハムレット』である。雑誌『少年中国』第6期に掲載された。続いて田漢訳「ロミオとジュリエット」が雑誌『觉悟』1923年第3期から第7期にかけて掲載される。尤も、どちらも底本は日本語訳であったという。このように、戯曲作品の本格的な紹介は1920年代以

降であった。

中国で初めてシェイクスピア劇が商業演劇の舞台に上がったのは、上演広告など確実な証拠のあるものとしては1914年4月5日、新民社による文明戯『女律師（ヴェニスの商人）』であり、1925年4月3日には春柳社による『春夢（オセロー）』の上演があった。但し、これらは中国語による上演である。翻訳ではなく英語での上演としては1896年7月18日、セント・ジョーンズ書院の夏学期修了式で『ヴェニスの商人』の法廷の場が上演されたとの記録があり、現在確認されている最も早い学生演劇上演である¹⁶。

「彼女」の最終段、同級生が雲羅の婚約について噂するのを耳にした影曼がショックと悲しみのあまりおかしくなるラストで、彼女は「Here's to my love! O true apothecary! Thy drugs are quick. Thus with a kiss I die.」¹⁷と唱える。ここで影曼が唱えたものは、『ロミオとジュリエット』第5幕第3場における死ぬ直前のロミオのセリフである。日本語では「さて、わがいとりの人のために！おお、正直だな、薬屋、貴様の薬はよくきくぞ。さあ、こう、接吻して、おれは死ぬ」と訳されている。影曼のセリフが原語通りであるところから、「彼女」において創立記念祭で上演された『ロミオとジュリエット』が中国語によるものではなく、英語によるものであったことがわかる。シェイクスピアの作品中の英語は初期近代英語であり、語彙や文法には現代の英語と異なる点が多々ある。学生による素人演劇とは言え、女学校の舞台でそのようなシェイクスピア作品を上演するのは、影曼と雲羅の在学している女学校の教育水準の高さを物語ってもいるだろう。

3. 2. 女性同士の友情か同性愛か

「彼女」と「こんなこと」においてヒロイン二人の友情は、ただの親しさではなく、極めて親しい特別なものとして描かれている。また、彼女達が『ロミオとジュリエット』を演じていることは、二人の親密な「友情」（とりあえずそう表現しておく）が悲劇に終わることの予告でもあるだろう。

しかし、「彼女」と「こんなこと」における二人の「友情」は異質なものである。以下、区別のために「彼女」のヒロイン二人を影曼 Y・雲羅 Y、「こん

なこと」の二人を影曼 L・雲羅 L として見ていこう。

影曼 Y と雲羅 Y の親密さは次のように描写される。

第三幕第四場の別れのシーンで、鄧雲羅は顧影曼の胸にしがみつきの、美しく人を惹き付け、わざと怒ったふりをしている様は耐え難いほど可愛らしかった。

顧影曼は雲羅の豊満で柔らかな体を抱きしめながら、彼女の微かに開いてキスをねだる唇を目にすると、限りない憐れみを感じ、心臓がバクバクと躍った。秘かにこう思った。「男じゃなくて残念。この可哀相な子を受け入れられないんだもの」

(中略)「あんたって、ほんと恥知らずよね。今夜の舞台でのあの可憐な節回し、本当に私の心をふにゃふにゃにしちゃったわよ。男じゃなくて残念。そうじゃなかったら、今頃私、魂を奪われちゃってた」

「ちえっ！あんたが男じゃないなんてね！」鄧雲羅は首をかしげて、微笑みながら答えた。

「あんたったら恥つてものを知らないのね」顧影曼は笑いながら言った。「本当に男が恋しいみたいに言っちゃって！いらっしやい、もう一度あんたを抱かせて、そしてもう一度あのうっとりするような節回しをやって聞かせて」言いながら近付くと、鄧雲羅を抱きしめようとした。

(中略)二人はひとしきりじゃれ合った。顧影曼は鄧雲羅のベッドで寝ようとしたが、雲羅が許さなかったので、腹を立てたふりで笑いながら寝に戻って行った。

ここには雲羅 Y を見て、自分が男性でないことを残念に思い、又それを実際に口にする影曼 Y が描かれ、舞台を下りても雲羅 Y を抱きしめようとするなど、身体的接触を求めている様も見て取れる。尤も、若い女の子同士がじゃれて抱き合ったりするのは、珍しいことではない。

以下は夏季休暇に雲羅 Y が帰省しなければならなくなり、しばしの別れを惜しむために二人が散歩に出た下りである。二人は河辺の美しい景色を見つめている。

二人はそんな風に黙ったまま、ぼんやりと腰を下ろしていた。満ち足りた気分で、

あそこで一生を過ごすことになっても、離れたくないような気持ちであった。

しばらくすると、雲羅は頭を影曼の肩に乗せ、か細い声で言った。

「影曼、私の心臓、物凄くどきどきしてる。まるで私の眼の前で、大きな不幸が待ち構えてるって言ってるみたい。私、凄く怖い。私をしっかりと抱きしめて、一生放さないで！」

影曼は片手で雲羅の腰を抱き、もう片方の手で雲羅の鳩尾を支え、慰めるように言った。「怖がらないで、私がいるじゃない。心の中で何を考えてるの。その怖い話を吐き出して」

雲羅 Y が語ったのは、両親が自分の結婚話を進めているという話だった。それを聞いた影曼 Y はショックを受け、泣きながら雲羅 Y に「結婚しないって約束して」と訴え、雲羅 Y は溜息をつきながら「あなた、どうして本当のロミオ様じゃないのよ！」と言う。これは『ロミオとジュリエット』第二幕第二場におけるジュリエットの有名なセリフ「ああ、ロミオ様、ロミオ様、なぜロミオ様でいらっしゃるの、あなたは？」を受けているだろう。そして、二人は恋人同士のように抱き合う。その翌日は雲羅 Y が学校を去る日の前日であったが、夜には二人は顔を寄せ合い、抱き合いながら眠った。

こうした影曼 Y と雲羅 Y の親密な身体的接触を伴う関係は、確かに読者に随分親しげであるとの印象を与える。

次に「こんなこと」の影曼 L と雲羅 L を見ていこう。劇のリハーサル終了後、影曼 L は雲羅 L を寮まで送って行く。雲羅 L は胸元や袖口に刺繍のある外国製のネグリジェに着替えると、「ああ、疲れた！」とベッドに倒れ込んだ。

「ジュリエット、マッサージをしてあげようか？」影曼は微笑みながら言うと、雲羅の傍らに行った。雲羅のはだけた襟元からピンク色の玉のような胸元が覗き見え、その襟ぐりからは微かに膨らんで柔らかそうな乳房の曲線が少しだけ見えている。雲羅の弓形の小さな唇と来たら更に可愛らしく、この時丁度ほんの少しだけ開いており、口の端には二つの小さなカーブ、頬には微かに凹んだえくぼが浮かんでいた。先ほどのリハーサルでロミオにキスをせがんだ様子よりも、ずっ

となまめかしく魅力的だった。ベッドの帳から時折、白粉の香りだろうか、髪や体から甘く酔わされるような香りが漂ってくる。

影曼は突然体を曲げると、自分もベッドに倒れ込み、手を伸ばして雲羅の首に触れながら言った。

「私の体はもうふにゃふにゃよ。何がこんな良い匂いなの？私に嗅がせて！」

「又からかっているのね、嫌な人！」雲羅は笑いながら、影曼を軽く押しやった。

「私のこと絶対嫌わないで。嫌われたら、私死んでやるから！」影曼は雲羅をぎゅっと抱きしめて言った。¹⁸

影曼はふと目を覚ました。雨は既に止んでおり、月の光が微かに帳の中まで射し込んでいた。見ると、雲羅が正面から彼女に見とれている。目が覚めたところを雲羅に見られて、少し恥ずかしくなり、影曼は手で雲羅の眼を覆うと、顔は彼女の肩に寄せ、小声で尋ねた。

「どうして目が覚めたの？」

影曼は雲羅の顔をこちらに向けさせようとしたが、雲羅は影曼の肩に顔を伏せ、クスクス笑っている。そのクスクス笑いのせいで、影曼の肩はくすぐったかった。唇が丁度雲羅の額の所にあっただので、影曼は思わず何度もキスをした。

雲羅が小さな声で尋ねた。「よく眠れた？」

「とってもね！」影曼は手で雲羅のすべすべの頬を撫でながら言った。「もし私が女じゃなかったら？」

上記二つの引用から、雲羅 L の身体描写に性的な眼差し——客観的な叙述ではなく、傍らの影曼の眼差しとして描かれていると言えよう——が注がれていることは明らかであり、「彼女」よりもはっきりと、二人の関係が単なる親密な「友情」などではないことを示しているのが見て取れる。

更に影曼 L と雲羅 L が夜散歩をする下りでは、雲羅 L が憂鬱そうな様子を見せる。影曼 L は「本当にセンチメンタルなんだから」と言って、雲羅 L の頬にキスをし、彼女の乱れた髪を整える。雲羅 L が泣きながら親に結婚を迫られていることを影曼 L に告げると、影曼 L もショックを受け、涙を流しな

がら、雲羅 L に次のように言う。

「世の中のことなんて、人の努力次第よ。私達がどうして、永遠に一緒にいられないなんてことがあるの？初等部の先生の陳婉真と Miss Chu を見てよ、もう五六年一緒に暮らしているじゃない。私達二人だって、彼女達に倣って駄目なことないわよ。(中略) 私のあなたへの愛はどんな男の人よりもずっと深いし、ずっと長く愛するわよ。わかってるでしょ？あなた、私と結婚しなさいよ」

そして、二人は「あなたは月で、私は傍のあの星」、「ずっと私の傍にいてね、私もずっとあなたの傍にいるから…」と言いながら寮へ帰って行く。

こうした描写に対しては、中国の研究者常彬も「通常の意味での同性愛テキストにかなり近く、同性間の性的吸引や性的親密さを表しており、一種の「同類を大切にする」精神的な恋愛（「五四」のコンテキストの下では一種の謀反的行為であった）であるだけでなく、互いに性的に惹かれ合う肉体的な恋愛でもある。[傍点著者]」¹⁹と述べ、「こんなこと」を女性同性愛のテキストであると見なしている。上記の引用に「精神的な恋愛」が「五四」のコンテキストの下では一種の謀反的行為であった」とあるのは、異性愛であったとしても「精神的な恋愛」は子孫を残すことが出来ないという点において、祖霊を祭祀する子孫を残すことこそが「孝」の概念であった儒教精神に完全に悖るからであるが、まして況んや女性同士の恋愛においてをやである。初等部の二人の女性教員が何年間も一緒に暮らしていることを挙げ、自分達もそれに倣うことを提案し、「あなた、私と結婚しなさいよ」とまで言うような、影曼 L と雲羅 L の具体的な将来まで見据えた関係性は、たとえ軽口であったとしても、当時の社会的文脈の中では異端以外の何物でもなかった。封建的家族制度から完全に背を向け、五四以降、先進的で近代性の実践でもあった異性との自由意志による恋愛でもない、女性二人だけの世界を築くこと。それが当時において、「そして、二人は幸せに暮らしました」というハッピーエンドになるはずがないことは明らかであるが、影曼 L のセリフは少女二人の関係がいかなるものかを明確に浮かび上がらせている。他方、「結婚」を口に

するほどの具体的関係性は、楊の「彼女」の二人には見られない。

鄭如玲は、凌の描き方について「二人の少女の恋愛感情の観察と理解という点において、明らかに凌の態度は楊よりもきめ細やかで寛容であり、思いやりを感じさせるものだ」とし、小説のタイトルである「こんなこともある」とは女性同士の恋愛が現実に存在することを指し示しており、異性愛のみが正常とされる中で女性同性愛の苦境と、そのように偏った状況への屈折した抗議を表していると述べる²⁰。

確かに、楊が「附字」で「影曼の気が触れるのがあまりにも慌ただし過ぎる」と周囲から批判された旨を書いている通り、楊の「彼女」は出来事をざっとなぞっただけという印象は否めず、凌の「こんなこと」と比べると、鄭如玲の評は正しいと言わざるを得ない。ただ、鄭如玲が楊の「彼女」について「女性同性愛が生ずるのは、本当にこのようなものだろうか？」と疑問を呈しているのは、そもそも前提を誤っている。凌の「こんなこと」が明確に女性同性作品であるのに対し、楊の「彼女」の主眼は女性同性愛にあるのではないのである。次節でそれを確認したい。

3.3. ロミオの孤独

楊の「彼女」と凌の「こんなこと」には、影曼と雲羅の境遇に大きな違いが見られる。以下に簡単な表にまとめてみる。

	影 曼	雲 羅
楊振声 「彼女」	孤児 伯母の家で育つ 兄は外国にいる 雲羅と同級生(?)	一人っ子 両親健在
凌叔華 「こんなこと」	両親健在 故郷には兄・嫂もいる 雲羅の一級上	父・姉ともに死去 故郷には母と兄がいる

「こんなこと」において、雲羅 L が最終的に結婚せざるを得なくなるのは、家庭の境遇によるものが大きい。一家の大黒柱たる父親を喪い、兄の上司が雲羅 L を後妻にと望み、母・兄ともにその結婚を望んでいる。即ち、家族による圧力である。更にその背景には当然、兄と母は上司からの申し出を断れないために、兄の仕事上の権力関係の影響も存在しているだろう。結婚などしたくなくても、雲羅 L は母と兄の期待に背くことができない。このように、雲羅 L がやむを得ず結婚を選択する、当時としては不自然ではない状況が設定されているのである。

一方、「彼女」においては、雲羅 Y には両親がいる。父親がいない雲羅 L とは異なり、どうしても結婚せざるを得ない状況ではない。逆に、孤児で身寄りのないのは影曼 Y の方である。しかも影曼は伯母の家で育ち、たった一人の肉親である兄も外国で生活しているという、寄る辺ない境遇が強調されている。夏季休暇も帰る家がないために、女学校に残るしかない。

影曼 L が雲羅 L の「一級上」と明記されているのは異なり、影曼 Y と雲羅 Y は「平素から親しい」とあり、そこから同級生であることが推測され、「一刻も離れられないほどに親密になった」とあるように、二人が一日中一緒にいる仲になった様が描かれる。「元々気性がさっぱりして、いくらか男性的」と形容される影曼 Y だが、実際の彼女の行動は、例えば既に見たように結婚話が持ち上がっていると語る雲羅 Y に対して、大きなショックを受け、泣きながら「結婚しないって約束して」と訴えるなど強い執着を見せるのみで、離れていく母親にすぎた幼子のようなものである。決して影曼 L のように、二人で一緒に暮らすことや自分との結婚を口にするのではない。夏季休暇中に雲羅 Y からの手紙を心待ちにし、手紙が届かないことに対しても、影曼 Y は疑心を抱いたり怒ったり失望したりと一ヵ月間落ち着かなく、ごく短い素っ気ない手紙が雲羅 Y から届くと泣かんばかりに腹を立て、「雲羅のところまで駆け付けて、目の前で自尽してやり、雲羅が後悔するかどうか見てやりたい」ほどである。そして、夏季休暇終了後は、雲羅と泣いて言い争う気である。影曼 Y のこうした境遇や言動からは、彼女の雲羅 Y への感情は同性愛によるものではなく、親友への強い友情であり、雲羅 Y の結婚話に対するショッ

クも身寄りのない孤独感から来る、親しい友人との分離不安を指摘できるのではないだろうか。

対照的に雲羅 Y は、作品終段に向かって一気に存在感を失っていく。夏季休暇中、影曼 Y に送った手紙は「ごく短い数句の挨拶言葉」に過ぎず、実際に彼女は夏季休暇中に婚約してしまう。これに対して雲羅 Y の弁明は何もない。両親に可愛がられて育った一人っ子の雲羅 Y は、最終的に両親の勧めの結婚を受け入れ、影曼 Y から離れていくのである。

「彼女」の最終段、同級生が雲羅 Y の婚約について噂するのを耳にした影曼 Y が、悲しみのあまりおかしくなるラストは次のように描かれる。

彼女達二人が話し終えていないところへ、窓の外からハハハと大笑いする声が聞えた。二人はびっくりして跳び上がった。走り出してみると、影曼が一人、踊りながらロミオの歌を歌い出したところだった。手には毒薬に見立てた瓦片を持ち、声高らかに唱えている。

Here's to my love! O true apothecary!

Thy drugs are quick. Thus with a kiss I die.

言い終えると後方に倒れ、まるで死んだようになった。二人は驚いて叫んだ。すぐに皆が出て来て影曼を部屋に運び入れ、誰もがこう訝しく思った。「彼女は何故突然気が触れたのかしら？」

『ロミオとジュリエット』においてジュリエットを喪った（と思った）ロミオが毒薬を飲み自害したように、影曼 Y はロミオの最後のセリフを言うなり倒れる。

影曼 Y が突如気が触れ倒れてしまうのは雲羅 Y の結婚を知ったからであるが、それは親しかった友人が自分には告げずに結婚してしまったという一種の裏切り行為にショックを受けたからでも、他の男に友人を奪われてしまったことへの強い独占欲からのショックでもない。ここで焦点化されたのは、影曼の孤独感から発した究極の絶望であった。孤児影曼 Y にとって、親友である雲羅 Y は唯一近い存在、ずっと一緒にいる家族を超えた存在である。

その雲羅 Y を失うことは、影曼 Y にとって自己喪失に等しいものでもあったのだ。強烈な自己喪失感「まるで死んだよう」であり、影曼 Y は作品中では意識を取り戻すことがない。

「こんなこと」と「彼女」の大きな相違は、雲羅 L が夏季休暇中に影曼 L に送る手紙に表れる。雲羅 L は「私があなただを忘れたんじゃないかなんて、よくまあそんなこと疑えるわね。私の方が、あなたは将来簡単に私を忘れちゃうんじゃないかって心配なのに」、「あなたは私の星、美しく輝く星。私の涙が見える？」というように恋人への言葉を並べ、「彼女」の雲羅 Y の素っ気ない手紙とは異なる。雲羅 L の手紙からは、彼女が結果的に男性と結婚をせざるを得なくても、影曼 L への愛情は変わらないということが読み取れるのである。実際、影曼 L はその手紙を何度も繰り返し読み、泣きながら手紙にキスをする。

そして「彼女」との最大の相違は、「こんなこと」の最終段である。影曼 L が倒れる点においては「彼女」と共通しているが、ラストの一文が決定的に異なる。以下を見てみよう。

影曼はバタリと床に倒れた。部屋の中で話していた者達が出て来て見ると、影曼の唇は真っ青である。声を震わせながら叫ぶ。

「きゃっ！ どうしたの？ 彼女、どうしちゃったの？」

すぐに影曼は同級生達によってベッドに運ばれ寝かされた。影曼は目を見開き、多くの者達が様子を見に来るのが目に入っていた。皆、何やら色々話しているようだったが、彼女にははっきり聞えない。もともと、聞くのもうんざりだった。眼を閉じているしかない。ほどなくして、雲羅が泣いているような姿が見えた... 笑っているようでもある！ そして又、泣いているようでもあった...

影曼はそれに我慢できなくなった。「ああ！」と溜息を吐くと、傍らに立っていた者達が口を揃えてこう言った。

「良かった良かった、意識が戻ったのね！」

影曼 L はショックで倒れるものの、彼女の脳裏には雲羅 L の泣いている姿

や笑っている姿が交錯している。影曼 L がそれに耐えられなくなり、はっきりと意識を取り戻すところで作品は終わる。影曼 L がこの先、たとえ雲羅 L がいなくても生きていかなければならないことが暗示されているとも読める。このラストシーンに鑑みて少し乱暴な言い方をすれば、「こんなこと」は女性同性愛の二人が、片方の女性が家族の圧力の下で異性愛へ取り込まれたことによって破局を迎えた作品と言い得るだろう。

そして凌の「こんなこと」に逆照射される形で、楊の「彼女」が女性同性愛小説ではなく、二人の少女の友情が片方の結婚によって引き裂かれる物語であったことも明らかになる。女学校において強い絆で結ばれた親友、それは自己同一化された存在でもあるが、自らの世界の全体を占めていたその存在の喪失によって、本来的に孤独な影曼 Y は自己をも引き裂かれ、ロミオに仮託して疑似的に死んだのであった。

ここで想起されるのは、楊の短編「貞女」(1920)と中編『玉君』(1925)である。楊はこの二作において、親に強制される封建的旧式結婚の被害者の少女を描いた²¹。「五四」を代表する作家の一人として、楊は一貫して封建性や旧体制に虐げられる弱者を書き続けてきたが、「彼女」もその流れの中にとらえられるのではないだろうか。親が娘に強要する結婚に端的に表れる当時の社会体制は、「彼女」においても同様に、雲羅 Y だけでなく影曼 Y をも不幸にしたのである。楊振声の「彼女」は必ずしも女性同性愛小説ではなく、少なくともそこに主眼はなく、近代的装置であった女学校の少女達ですら社会に色濃く残存する封建性に屈し、個我の確立以前に個我を喪失する悲劇として読者の前に提示されたと言える。

4. 結

以上見てきたことを簡単に振り返ると、楊振声の「彼女」が描いた二人の少女の「友情」は、ごく親密なものではあったにしろ、同性愛と呼ぶほどではなかった。影曼 Y との友情は雲羅 Y にとって、熱しやすく冷めやすいクラッシュに過ぎなかったようで、自身の婚約に関して影曼 Y への思いやりは何一

つない。影曼 Y は身寄りのない孤独な少女であり、自己の分身にも身内にも等しい大切な存在を失い、究極の絶望ゆえに気が触れてしまう。影曼 Y には、『ロミオとジュリエット』において秘かにジュリエットと結婚するロミオの勇氣はなく、「こんなこと」の影曼 L のように二人で一緒に暮らすという選択肢も思いつかなかったのである。そして、そのことは「彼女」の影曼 Y には、女学校の生徒という点にのみ 1920 年代の「近代性」が刻印され、精神面では前時代と変わらぬ、あくまでも社会的弱者としての役割が与えられたということを意味しているだろう。

これに対して、凌の「こんなこと」は楊の「彼女」を換骨奪胎する際に二人の少女の境遇を変えることで、明確に少女同士の恋愛関係を描き出した。影曼 L が雲羅 L に二人で一緒に暮らすことを提案し、「あなた、私と結婚しなさいよ」と言うシーンには、封建的社会規範とは大きく隔たった強い意志性を見出すことができる。「彼女」から「こんなこと」への変奏には、若い女性の自らの意志による選択という、新時代の新女性のありようが克明に織り込まれている。ただ、彼女達はその選択を貫徹せず、結局当時の社会体制の前に屈する他なかった。影曼 L がラストでおかしくなってしまうのは、愛する雲羅 L が女性である自分とではなく、男性と結婚したことに打撃を受けたからであった。中国文学における女性同性愛の系譜を辿るのは本稿の狙いではないが、「心が籠って繊細で美しい」(楊)、「大変美しいこの一篇」(徐)と評された凌の「こんなこと」と、民国期中国の女学校における少女のセクシュアリティについては、より一層の研究対象とされてしかるべきであると考えられる。

凌の「こんなこと」の雲羅 L は父がなく、母と兄によって他の男との結婚を強く勧められ、それに逆らえずに結果として後妻として嫁ぐことになる。家族が恋愛の障害となるという点において、雲羅 L はまさしくジュリエットであったと言えるだろう。

そして、雲羅を失った影曼 Y も影曼 L も結果的には封建的旧式結婚の被害者となってしまう。彼女達も当時の家制度によって抑圧されたジュリエットであったのだ。

- 1 女子教育に関しては、以下を参照した。熊賢君著『中国女子教育史』山西教育出版社 2006、夏曉虹著、藤井省三監修、清水賢一郎・星野幸代訳『纏足をほだいた女たち』朝日選書 1998、関西中国女性史研究会編『中国女性史入門』人文書院 2005、末次玲子著『二〇世紀中国女性史』青木書店 2009
- 2 盛英主編『二十世紀中国女性文学史』上巻、天津人民出版社 1995 を参照。
- 3 参考までに 1916 年の統計を挙げれば、全国に女学校は 3,461 校、女子生徒数は 172,724 人である。一方、高等教育に関して見れば、1920 年に北京大学が全国で初めて女子学生 9 人を聴講生として受け入れた後、1922 年から 23 年には大学・高等師範学校などの高等教育機関の女学生は 887 人、学生総数のわずか 2.5% に過ぎなかった。注 1 熊賢君前掲書参照。
- 4 曹丕「典論」藤堂明保監修、神塚淑子訳『文選下』学習研究社 1985
- 5 楊振声については現在、中国本国ではあまり研究されておらず、「過去の人」として忘れられた存在となっている。日本においては、宮尾正樹「楊振声と「玉君」」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第 7 号、1988）、拙稿「楊振声「抛錨」・石華父『海葬』・柯靈『海誓』をめぐって——恋愛と復讐の変奏」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第 32 号、2013）、「楊振声「搶親」・「報復」と民国期中国の強奪婚——少女は語らない」（『言語文化論叢』金沢大学外国語教育研究センター紀要、第 18 号、2014）、「楊振声と「五四」 楊振声の「五四」（『野草』第 94 号、2014）などがある。また、楊振声の国語教科書編纂事業について、『中国文芸研究会会報』において今泉秀人氏による研究・紹介が進んでいる。
- 6 凌叔華については中国日本双方で一定程度の研究の蓄積がある。例えば日本では飯塚容「凌叔華——人と作品」（『中央大学文学部紀要』第 106 号、1983）、大槻幸代「凌叔華と「新月社サロン」——恋愛結婚・核家族制度およびマンスフィアールの受容をめぐって」（『日本中国学会報』第 46 号、1998）、阿部沙織「〈新女性〉の死：凌叔華「女兒身世太淒涼」をめぐる一考察」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第 27 号、2010）など。
- 7 例えば近年では劉揚揚「論大革命前後（1925-1926）凌叔華の小説創作」（『現代文学研究叢刊』2014 年第 4 期）、崔濤「“五四”女性文学同性愛之反叛与反思」（『求索』2013 年第 9 期）、郭海鷹「從女同性恋書写看凌叔華的女性觀——以「説有這麼一回事」為例」（『広東外語外貿大学学报』2011 年第 6 期）など。
- 8 楊振声に関する伝記的記述は、季培剛編『楊振声事跡編年』（2014 年 11 月時点で未刊行、九三学社より刊行予定）に拠る。著者季培剛氏のご厚意により、未刊原稿（PDF 版）の利用の許可を得た。
- 9 凌叔華に関する伝記的記述は、宋生貴編『凌叔華的古典夢影』東方出版社 2008 に拠る。
- 10 楊振声「説有這麼一回事附字」『晨報副鐫』1926 年 5 月 3 日。『凌叔華文存』上巻、四川文芸出版社 1998 も参考にした。
- 11 素心「關於『説有這麼一回事』的信并一点小事」『晨報副鐫』1926 年 5 月 5

- 日。『凌叔華文存』下巻、四川文芸出版社 1998 も参考にした。
- ¹² 1925 年、『現代評論』に凌叔華が発表した小説「酒後」を受け、二ヶ月後に丁西林 (Ding Xilin, 1893-1974) が同タイトル的一幕劇の戯曲を『現代評論』に発表している。これはあくまで小説の戯曲化と言えるだろう。
- ¹³ 『晨报』副刊に関しては、以下を参照した。周葱秀・涂明著『中国近現代文化期刊史』山西教育出版社 1999、馮并著『中国文芸副刊史』華文出版社 2001
- ¹⁴ 同注 11
- ¹⁵ 徐志摩「志摩附識」『晨报副鐫』1926 年 5 月 5 日
- ¹⁶ 中国におけるシェイクスピア受容に関しては、以下を参照した。瀬戸宏「中国のシェイクスピア受容史」(『シアターアーツ』第 11 号、2002。瀬戸宏氏のサイト転載に拠る。http://www.asahi-net.or.jp/~ir8h-st/ryuunokai_034.htm 2014 年 11 月 28 日閲覧)、瀬戸宏「中国シェイクスピア受容の黎明」(『撰大人文学』第 19 号、2012)、夏嵐「中国におけるシェイクスピア戯曲の翻訳と出版」(『富山大学人文学部紀要』第 51 号、2009)、瀬戸宏「上海戯劇協社『ヴェニスの人』上演をめぐって」(『演劇学論集』第 57 号、2014)
- ¹⁷ 楊振声「她為甚麼忽然發瘋了？」『晨报副鐫』1926 年 5 月 3 日。以下、本作の引用は全て同テキストに拠り拙訳。『楊振声選集』人民文学出版社 1987 も参考にした。
- ¹⁸ 素心「説有這麼一回事」『晨报副鐫』1926 年 5 月 3 日。以下、本作の引用は全て同テキストに拠り拙訳。『凌叔華文存』下巻、四川文芸出版社 1998 も参考にした。
- ¹⁹ 常彬著『中国女性文学話語流変 1898-1949』人民出版社 2007
- ²⁰ 鄭如玲「是女同問題？還是女權問題——談〈説有這麼一回事〉的主題所在」、臺灣國立中央大學「性／別研究室」サイトに拠る。
http://sex.ncu.edu.tw/course/liou/4_Papers/Paper_07.html 2014 年 11 月 28 日閲覧
- ²¹ 注 5 宮尾論文及び拙論に詳しい。

その他参考文献

- 中野好夫訳「ロミオとジュリエット」『シェイクスピア全集 6』筑摩書房 1967
河合祥一郎著『「ロミオとジュリエット」恋におちる演劇術』みすず書房 2005

【附記】

本稿は学術研究助成基金助成金の交付を受けた基盤研究 (C)「近代都市・青島における知識人の交流と文化空間の創成」(課題番号: 24520387、研究代表者: 富山大学・齊藤大紀) による研究成果の一部である。